

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	公衆衛生と感染症
別タイトル	Public health and infectious disease
作成者（著者）	長谷川, 友紀
公開者	東邦大学医学会
発行日	2021.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 68(1). p.19 19.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2020 027
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD42087986">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD42087986</a>

## 公衆衛生と感染症

公衆衛生の起源は、人が集まって住むことにより派生する健康問題への対応であり、衛生的な環境の確保と感染症対策は、常に最大の関心事であった。臨床においてはワクチンや治療法の開発に大きな関心が寄せられるが、コレラや結核など、感染症のコントロールの多くは、ワクチンや治療法がない状況下でなされており、これらの開発は比較的最近のことである。新型コロナウイルスの世界的大流行（pandemic）は、公衆衛生的な方法論が問題解決にどこまで寄与することができるかを改めて問うものとも考えることもできる。

新型コロナウイルス世界的大流行対策の目標は、(1)重症患者の急増、超過死亡の増加を避けながら、(2)集団免疫の確立を図り、(3)経済への影響を最小限にとどめることである。中国、西ヨーロッパ諸国、米国においては、重症患者の急増にあわててロックダウンで対応したために、これが一般的な方策のように認識されているが、本来は、上記政策目標に対する影響を比較検討し、どのような方策が採用されるかが検討される必要がある。

今回の新型コロナウイルス世界的大流行は、医療のみならず社会のあり方そのものに大きな影響を与える可能性がある。過去の世界的大流行を振り返ると、14世紀のペストは、当時の世界人口4.5億人のうち1億人を死亡させ、荘園の解体を促進し、人口減による農民の地位向上、社会の指導層の若返り、共通語としてのラテン語から各国語の使用を促し、その後の国家のアイデンティティ確立に寄与したといわれる。第一次大戦中のスペイン風邪は戦時の劣悪な衛生環境と相まって、世界で約5000万人の若年者主体の死亡をもたらした。戦争の終結を早めるに至った。社会に及ぼす影響については、第一次世界大戦の戦後処理が不十分で、その後の第二次世界大戦につながったといわれており、スペイン風邪単体の影響を特定することは困難である。今回の世界的大流行により、感染症対策の位置づけが再認識

され、対面の社会的コストの上昇にともない、テレワーク、電子決済など社会のIT化が促進されることが予想されるが、総体としてどのような影響がみられるかは今後の検討課題である。

感染症は、社会に影響を与えるのみでなく、社会の（しばしば病的な）構造も明らかにする。本来、被害・加害の概念と異なるものであるが、感染者は感染源となりうるとして、しばしば加害者のごとく取り扱われる。新型コロナウイルスは潜伏期が比較的長く、不顕性感染が多いこと、無症状でも感染源となりうることは、感染のコントロールを困難なものとしている。特に貧困のため密集した生活をしている、対面での作業に従事せざるを得ないなど社会的弱者は感染症に罹患しやすく、差別の誘因となる。また、社会防衛のための行動履歴の把握と公表、患者やクラスターの発生した店名や事業所名の公表は、しばしばプライバシーや生活を営む権利を阻害する。

過去の教訓からは、エイズ、梅毒、レプラなどのように誤った行動に対する天罰であるなど、疾病に意味を与えること（隠喩）は、患者やハイリスク者を地下に潜らせ、適切な治療を妨げるのみでなく、流行のコントロールの妨げになることが多い。今回の新型コロナウイルス感染も、接待を伴う飲食など、行き過ぎたメディア報道などが散見される。

感染症の世界的大流行は、不安感から大きなストレスを人々に与え、しばしば非合理的で行き過ぎた反応を生じさせる。各国の対応では、まさにその社会の成熟度が試されていると言えよう。医療にかかわるものとして、感染者への医療の提供体制を確保することは優先課題であるが、併せて、社会的弱者や感染者に対する配慮、社会的正義と公平とは何かについて思いを巡らせるべきであろう。

（東邦大学医学部社会医学講座教授：長谷川友紀）

DOI：10.14994/tohoigaku.2020-027